針刺す痛み「局所麻酔」で軽く

小児科などで取り組み広がる

注射や採血で感じる痛みを、局所麻酔で和らげる取り組みが広がっている。痛みへの恐怖による失神や転倒のほか、病院や注射嫌いにつながる恐れもあり、海外では長年使われてきたクリームやパッチ式の麻酔が国内でも小児医療や透析の現場で使われ始めた。新型コロナウイルスのワクチン接種でも利用が検討されている。

採血や注射前に 恐怖も和らぐ

「子どもが痛がる姿を見ずに済むのでありがたい」

福岡市東区に住む女性(41)はそう話す。4歳の次男は0歳児の頃、先天性疾患で福岡市立こども病院に入院。血液検査の前に勧められたのがクリーム式の局所麻酔だった。

クリームを直径数センチ大に塗り広げ、1時間待つ。拭き取った箇所に針を刺せば痛みが弱まる仕組みだ。

次男は多い時期はほぼ連日採血を受けた。現在も半年に1回採血があるが、針を怖がらず、女性のひざの上でおとなしく受ける。

一方、長男(7)が受診する別の診療所では局所麻酔の処方がない。泣き叫ぶ長男の手足を押さえて注射を受けさせるという。「注射の日は朝から晩までぐずっている。痛みやショックが心に残っているのかも」

国内では注射や採血時の痛みをとるクリーム剤とパッチ剤の局所麻酔薬がある。

福岡市立こども病院では20 16年から使い始めた。古野憲司・総合診療科長は、「とれる痛みはとってあげたいという思いがきっかけだった」と話す。

古野医師によると、注射時の痛みや、痛みに対する恐怖は、めまいやふらつき、失神などの「血管迷走神経反射」と呼ばれる反応につながる恐れがある。

カナダでの研究では注射の針に対して親の24%、子どもの63%が怖いと感じ、恐怖が予防接種を受けない選択に結び付く傾向も指摘されているという。

こども病院では、注射や採血の前に絵本や人形で説明するなど、子どもの不安を和らげる取り組みを進めており、局所麻酔もその一環だ。

麻酔が効くまで1時間待たねばならない手間などを理由に当初は院内で理解が広がらなかったが、勉強会を重ねたり、医師自ら局所麻酔の効果を体験したりするうちに、よく使われるようになった。

現在では、注射や採血の多くの場合に局所麻酔を紹介し、1カ月でのべ1千～2千人に使われている。初めて使った子どもが「痛くない！」と驚いたり、さらに小さな子どもでは注射されたことに気づかなかったりすることもある。

古野医師によると、新生児や、腕に傷がある患者には使用を控えるが、適正量でのデメリットはほぼないという。

一方で、使用にあたって古野医師が感じるのが注射に対する「常識の壁」だ。子どもへの局所麻酔を提案しても、親から「これくらいは我慢させないといけない」と断られることがしばしばある。

古野医師は「歯科の治療で麻酔をかけない人はいないと思うが、小児科の注射や採血ではなぜか、親にも医師の間にも『我慢して当たり前』の意識が残っている。子どもが感じる痛みや恐怖を軽んじない方がいい」と話す。

コロナワクチン接種で利用も

外用局所麻酔薬を手がける佐藤製薬(本社・東京)によると、北欧では1980年代から使われ始め、日本での最初の承認は2012年、レーザー照射療法の痛みの緩和が対象だった。

国内で注射や採血時に使えるようになったのは15年以降。海外に比べ、注射などの処置に伴う痛みを緩和する意識が国内では遅れてきたとされるが、同社の担当者は「小児医療や繰り返し針を刺す透析医療の現場を中心に、全国で使用機会が広がりつつある」と話す。承認当初に比べて年間の使用量は増えているという。

公的な薬価は、クリームが標準使用の1グラムで約190円、パッチは1枚約350円。保険診療に当てはまらない予防接種では、全額が自己負担になる場合がある。

全国で進む新型コロナのワクチン接種で、局所麻酔が使える医療機関もある。新潟県長岡市の「キャッツこどもクリニック」では、コロナ禍以前から予防接種時にパッチ剤の局所麻酔を使ってきた。7月から始まる12歳以上の子どもや若者向けのコロナワクチン接種の際にも、局所麻酔を案内する予定だ。

磯部賢諭(まさつぐ)院長は「新型コロナを含め、ワクチンを打ってもらうことはとても大切。そこに痛みや我慢は必要ありません」と話す。

(竹野内崇宏)

右 注射の前に腕に局所麻酔のパッチを貼った子ども
左 手の甲に針を刺す前に、局所麻酔のクリームを塗った様子
＝いずれも佐藤製薬提供